

暗殺姫は籠の中

登場人物紹介

軍師

フロッケンベルク国の下級鍊金術師の服装をした謎の男。

エルнст

ロクサリス国の魔術師。  
冷酷な人物。

ルーディ

フロッケンベルク国の下級鍊金術師。  
妙に嗅覚が鋭い。

アイリーン

おさなじみ  
ヴェルナーの幼馴染。  
バーグレイ商会という  
隊商の首領の娘。

ロットン

フロッケンベルク国の衛兵の息子。  
よく城の中庭に遊びに来る。

ビアンカ

ロクサリス国出身の少女。  
全身に猛毒を宿す  
『毒姫』として育てられた。  
隣国の王ヴェルナーの暗殺を  
命じられるが……？

ヴェルナー

フロッケンベルク国の若き国王。  
穏やかな性格で  
臣下にも慕われている。  
賢王として知られ、  
時には策士な一面も見せる。

## プロローグ

——明日、あの綺麗な城の王をわたしは暗殺するのね。

ビアンカは宿の二階で、窓から夕暮れの外を眺めていた。

夕陽に輝く北国フロツケンベルクの王城は、とても美しい。あんなに綺麗な建物、初めて見た。城の手前からは城下街が広がり、ビアンカのいる宿もその中にある。

窓から見える街の通りは、旅装をした人や幌馬車でどこも埋め尽くされ、賑やかだ。

旅人の多くは、剣を下げて兜<sup>かぶと</sup>や籠手<sup>こて</sup>などを身につけた男性だった。彼らは他国の戦に参加して金を稼ぎ、故郷であるこの国に帰つて来た傭兵だと聞く。

こうした街並みも、傭兵も、幌馬車も、数日前までビアンカは見た事がなかつた。

彼女は隣国ロクサリスにて、老師と呼ばれる優れた魔術師たちに育てられ、今まで外の世界には一步も出る事が許されなかつたのだ。

なぜならビアンカは、全身に猛毒を宿した暗殺道具『毒姫』なのだから。

毒姫が外の世界に出られるのは、老師に暗殺を命じられた時のみ。ビアンカは明日、フロツケンベルクの王をその身の毒で殺し、すぐに自害しなければいけない。

死は怖いけれど、老師の命令である以上、仕方のないことだ。

胸中で頷いた時、背後から大きなイビキが聞こえた。振り向くと、テーブルに突つ伏して熟睡している中年男の姿がある。その足元には、空の酒瓶が何本も転がっていた。

男は、老師の命を受けた使節団の長で、明日はビアンカをこの国の王に献上する役となっている。起きそうにない使節団長と、窓の外に広がる楽しげな街並みへ、ビアンカは交互に視線を向いた。勝手に出歩くなと言われているので、初めて外に出られたのに、一步も自由に歩いていない。物珍しい景色を、馬車や宿の窓からじっと眺めるだけ。

いけないと思いつつ、抗いがたい誘惑が、ビアンカの足をそろそろと戸口のほうに歩ませる。  
(ほんの少しだけ……すぐに戻るのだから……)

ドキドキと心臓を高鳴らせ、ビアンカは宿の前にある通りに出た。

旅人たちとはそれぞれ、自分を歓迎してくれる家を、一日散に目指しているらしい。雑踏の中、道

の脇にある家々から、「おかえり!」「待っていたよ!」などと、嬉しそうな声が聞こえる。

脳に脈わいに圧倒されながら、辺りを見物していたビアンカは、ふと一点に視線を留めた。

道脇で、右腕と左足にギプスをはめた傭兵らしき男が立ち往生していた。松葉杖の先が溝に引っかかってしまったようだ。片腕と片足しか使えなくては、自力で抜くのは難しいだろう。

「……お手伝いしましようか?」

ビアンカが声をかけると、男が驚いたように顔を上げた。

兜を深くかぶっているうえに、髭が伸び放題なので、男の顔はよく見えない。もじやもじやの髭

の奥から「すまない。頼む」と微かに聞こえた。

ビアンカは自身の毒が周囲につかないよう、常に手袋をはめている。思いきって両手で松葉杖をしっかりと握り、男と共に力を込めて引くと、意外に深く食い込んでいた杖はなんとか抜けた。

無事に抜けた松葉杖を男に渡し、ビアンカはホッとして微笑む。

そのまま素早く踵を返して宿に駆け戻ると、幸いにも団長はまだぐっすり寝ていた。

勝手に出歩いたうえ、見知らぬ相手に接触するなんて、もしバレたら大変なところだ。

改めて思うと怖くなってきたけれど……死ぬ前に少しでも、誰かの役に立てたことは嬉しい。

翌日の昼。

ビアンカは昨日見た美しい王城の、煌びやかな謁見の間に入った。

顔を覆っていたヴェールを静かに取り、玉座にいる若き国王——暗殺対象へ深々と頭を下げる。

「お目にかかる光榮でございます陛下。私はビアンカと申します。不束者にございますが、どうぞ口クサリス国からの献上品の一部に、この身が加わることをお許しください」

貴族や国同士のお付き合いには、賄賂とはまた違つた意味で、互いへの贈り物が欠かせない。それは相手に対する敬意の表れだつたり、富裕さを見せつける目的だつたりするが、とにかく高価な品が行き来する訳だ。

たとえば鳥の卵ほど大きなルビー、箱にずらりと並んだ大粒の真珠、職人が十年がかりで織りあげた見事な絨毯、象牙に毛皮に金銀細工……

そして中には、生きた贈り物もある。突然変異の珍獣や、美しい魚など。ただ、これは多くの場合、微妙だつた。輸送中に死んでしまう可能性が高かつたし、その後の管理にも手間がかかる。気に入らなかつたからといって、始末してしまうのに抵抗を感じる者もいるだろう。

だから『生きた土産』と言えば、大抵、見た目の美しい奴隸を指す事が多かつた。

ビアンカは、ロクサリス国から隣国の中王へ差し出された、生きた献上品という訳だ。

実際、彼女は一国の王への贈り物として申し分ない美少女だった。

きめこまやかな雪白の肌に、絹糸のように艶やかな栗色の長い髪。卵型の小さな顔に輝くのは、大きなエメラルド色の印象的な瞳だ。

美しいドレスに包まれた肢体は、全体的にすらりとしている。ただ胸や腰まわりは、十八歳とい

う年齢相応に十分発達していた。

ロクサリス王家秘蔵の名画や、見事な細工の宝飾品などの横に並べられたビアンカを、謁見の間に同席しているフロツケンベルクの家臣たちがジロジロと眺めてくる。

彼らの胡散臭げな視線に、国王暗殺という目的を見透かされているような気がして、ビアンカは非常に落ち着かない気分だつた。

もつとも、こんな立派な場所に立つのは初めてだつたから、緊張していた事もある。

フロツケンベルク王宮の謁見の間は、とても煌びやかで荘厳だつた。

精密な彫刻が施された白い柱に、金と深い青で彩られたドーム型の天井。床は磨きぬかれた大理石で、踏んで歩いていいものか躊躇いそうになるほどだ。

ビアンカは手袋をはめた両手を握り合わせ、全身の震えを必死で抑える。

ともすれば俯きそうになる顔を正面に固定し、フロツケンベルクの国王ヴェルナーを見つめた。

彼はまだ二十代後半といったところだろう。少しクセのある金茶色の髪に、深い色の青い瞳。顔立ちはどちらかといえば、男らしいというより、線の細い纖細なつくりをしている。

均整のとれた身体に丈の長い立派な上着を羽織り、風格のあるどつしりした玉座に座る彼は、いかにも高貴な雰囲気をかもしだしていた。

ビアンカがヴェールをとると青い目は軽く見開かれたが、驚いたようなその表情はすぐに消えた。

「ようこそ我が國へ。歓迎する、ビアンカ」

若き王は、ビアンカへゆつたり微笑みかけると、彼女の斜め前に立っているロクサリス国の使節

団長へ視線を移す。

「ロクサリス国王からの、素晴らしい贈り物の数々は頂戴した。近く、我が国からも使者を向かわせていただく」

「ありがとうございます」

中年の使節団長が丁重に返答をし、格式ばつた言葉でしばらくヴエルナーとやりとりを続ける。

ビアンカは、みじろぎもせずにそれを聞いていた。

しかし、使節団長は話の途中でにこやかな笑みを引き響らせる。そして、ビアンカを伴つて謁見の間を出る頃には、額にうつすらと汗まで浮かべていた。

何しろ彼は献上品とビアンカを置いてすぐ去る予定だったのに、言葉巧みにヴエルナーに誘われ、この城へしばらく逗留する事になつたのだ。

城の召使いが、使節団員たちを部屋に案内する。

ビアンカも彼らの近くに部屋を与えられるそうだ。城の長い廊下を歩きながら、ビアンカは心の中で首をかしげた。

（どうして、こうなつたのかしら……？）

柔らかく流暢なヴエルナーの言葉は、使節団長へ絡みつき、いつの間にか数日の逗留を断れないような話の流れになっていた。

なぜヴエルナーが使節団を引きとめたのか不思議だつたが、ビアンカは老師に命じられているとおり、余計な事を考へるのはやめた。

城の内部を眺めつつ、硬い廊下にコツコツと足音を響かせて歩く。

フロツケンベルクの王宮は、彼女が見知った場所とは随分違つていた。

ビアンカが育つたのは、希少な魔法の才を持つ者が多い、ロクサリス王国。その中でも最重要機関である魔術師ギルドだ。彼女は、ギルドの広大な敷地の一部、高い堀に囲まれ、上部を透明な魔法の結界で覆つた『庭園』と呼ばれる場所でずっと暮らしていた。寒風や雪を結界の屋根が防ぎ、いつも温かく保たれた『庭園』では、薬草がすくすくと育つ。あの『庭園』はそういう場所だ。生まれつき魔力を持つ魔法使いの中でも、特に高い魔力を持つ人間——偉大な、選ばれし存在である『老師』たちが管理する、常春の園。そこは、老師たちが魔法に使うための薬草を、効率よく育てあげる場所だ。

ビアンカもその薬草の一種だと教えられていた。

だから、『庭園』で育つたビアンカたちは、身体のつくりこそ人間でも、人間ではないと老師たちは言う。『庭園』の管理者で魔術師ギルドの長官でもある老師たちは、ビアンカたちを『庭園』の産物だと見なしていた。言わば、肉でできた植物だ。

ビアンカたち肉植物は老師たちが管理する『庭園』のため、様々な用途に使われる。

大抵は新しい魔法薬を試す時の実験体だが、見た目の良い肉植物は、外の人間へ奉仕するよう教育された。

ビアンカは、その中でも『毒姫』と名づけられている品種で、一際変わった用途に使われる肉植物だ。

育て方は、大変難しい。女の赤子に、ある毒草を毎日、少量ずつ摂取させ、ゆっくりゆっくりとその毒への耐性をつけさせていく。

大多数の赤子が毒に負けすぐに死んでしまい、生き残る者は一割に満たない。けれど、毒に打ち勝ち成長出来的少女は、全身の体液が猛毒と化し、髪にも爪にも強烈な毒を帯びた『毒姫』となる。彼女たちの指や髪が、ほんの少しでも触れた水は、一口飲んだだけでも、通常の人を二日三晩は苦しめる。水に染み出した毒の量によつては、手足が一生動かなくなる場合もあつた。

彼女たちの身体で最も有害なのが体液で、口にすれば、わずか数滴で即、死に至る。毒姫は、腕力も武芸も持たない。非力なか弱い少女だけれど、口づけ一つで相手の命を摘みとれる暗殺道具なのだ。

美しく豪華に飾られた彼女たちは、好意を装つて敵のもとへ献上される。

生きた献上品は大抵の場合、すぐ夜伽に使われ、触れ合つた途端に相手を絶命させるのだ。

そのあとで、あらかじめ自害の方法を教え込まれている毒姫たちは、敵の部下に見つかる前に素早く自らの命も摘みとる。

ビアンカも今夜、ヴエルナーの寝室でそうなるはずだ……

——数日前の夜。

ビアンカはいつものように、『庭園』の草花の手入れに行こうとしていた。

肉植物たちの殆どが、『庭園』の植物を育てるために一日中働かされる。

しかし数人いる毒姫たちは、どこの貴族や王宮に送られても良いように、数ヶ国語の読み書きや、踊りに歌などの教養を身につける時間のほうを優先させられていた。

肌荒れや日焼けを避けるために、日中に重い肥料や水樽を運ぶといった労働も免除されている。だからビアンカはせめて日没後のわずかな時間だけでも仲間を手伝いたくて、夜になると熱心に働いた。

ところがその日は、宿舎から出ようとしたところを、老師の一人に呼ばれたのだ。

そして、今夜中に『庭園』を出て隣国フロッケンベルクへ行き、国王ヴエルナーの命を枯らせさせ命じられた。

そのほかの細かい道中の事は同行する使節団長に従え。老師が口にしたのはそれだけ。ビアンカは驚いたものの、すぐにかしこまりましたと答え、余計な質問はしなかつた。余計な事を考えるのは罪だと教えられている。

たとえば、どうして隣国の王を毒殺しなければいけないのかという疑問も、老師が説明しなかつたのならば、ビアンカがそれについて深く考えたり質問したりるべきではないのだ。どう生き、いつどうやって死ぬのか、全ては自分たちよりずっと優れた老師たちが、間違いのないように定めてくれる。

理由など知らなくても、老師の命令は絶対だから、フロッケンベルク王ヴエルナーの命を毒で枯らさなければ。

役割を果たしたあとで、ビアンカは自害する。万が一失敗した時は、逆にヴエルナーに殺される

だろう。

どちらにしてもビアンカは、数日中に死ぬ。

死ぬのも怖いもの怖いけれど……老師の命令である。

余計な事は考えず、ただ老師様に従うべきなのだ。

そうして、ビアンカは旅立つた。

案内された宿泊用の部屋は、いくつもの部屋が続き扉で繋がっている立派な客室だった。

使節団の男性たちは、数人ごとで一部屋を使い、ビアンカは一番狭い部屋を一人で使用するよう

に言われる。ビアンカの衣類が入った荷物もその部屋に置かれた。

一番狭いと言つても、ビアンカが『庭園』にいた頃、複数で使つていた部屋よりずっと広い。

瀟洒なデザインのテーブルセットや立派な安楽椅子に、そのまま寝転べそうな大きい長椅子。柔

らかそうな寝具の揃つた寝台などが置かれた、とても豪華な部屋だ。

ビアンカが立つたまま綺麗な天井絵を眺めていると、不意に続き部屋の扉が開いた。苦々しげな

表情の使節団長が入ってくる。

「ぐそっ、予定は変更だ。今晚、国王がお前を呼んでも、具合が悪くなつたふりをして時間を稼げ。

お前が役目を果たすのは、俺たちが安全にずらかつたあとだ」

先ほどまでとは大違いの乱暴な口調と態度で、使節団長はぎろりとビアンカを睨んだ。

「はい」

ビアンカは頷いたが、ふと心配になる。ヴエルナーは彼らの逗留期間をはつきりと言わなかつた。自分が役目を果たすのは一体、何日後なのだろう？

「ただ……わたしはあれがなくては……」

「念のために数日分の予備を持ってきてある。ほら、今日のだ」

団長が上着のポケットから小さな薬包を取り出し、テーブルの上に載せた。

テーブルには水差しとグラスが用意されている。ビアンカは手袋をした手でコップに水を少量だけ注いだ。薬包を開き、中に入っていた茶色い粉薬を口に含む。舌に広がる苦味を堪えつつ、グラスを顔より高く持ちあげ、グラスの縁に唇が触れないよう、口を大きく開けて、慎重に水を口内へ流し込んだ。

行儀も見た目も悪いやり方だが、庭園の外ではこうしようと教え込まれていた。

食器類に口をつければ、唾液が付着する。何かの拍子にほかの人間がそれに触つたりすれば、猛毒に苦しめられるだろう。それが騒ぎとなると、目的を果たす前に止体がバレかねない。

慣れない飲み方に苦戦しながら、苦い粉末をようやく喉に流し込むビアンカを、団長が薄気味悪そうに眺めていた。

この粉末は、アコニトという草を乾燥させたもので、本来ならば致死の毒薬だ。

しかし、赤子の頃から時間をかけてこの毒を全身に宿したビアンカは、今では毎日これを呑まなければ生きていけない。

団長が、持参した革袋を広げた。ビアンカは空っぽの薬包をその中へ入れる。

彼女は長袖のドレスを着て、手袋もしているし、自分の毒が辺りに付着しないように気をつけていた。それでも団長は布越しにもビアンカに触れないよう、慎重に避けている。

その時、廊下から複数の足音が近づいてきて、外と繋がっている扉がノックされた。

「ビアンカ。ヴエルナーだが、君と少し話がしたい。入つても良いだろうか？」

(え? )

紛れもない国王自身の声に、ビアンカは驚いて使節団長の顔を仰ぎ見た。

団長にも予想外だつたらしく、青ざめて扉を睨んでいる。

「寝込んだふりをしろ。疲れが出たらしくと俺が言い訳をする」

革袋を上着の中に突っ込んで隠しつつ、団長が小声で囁いた。

寝台を顎で示され、ビアンカは急いでドレスの隠しを探り、極薄の防水布を取り出す。それを枕の上に広げ、髪が触れないようにした。それから、靴を脱ぎ、掛け布へ潜り込む。目を閉じると同時に、扉を開ける音がした。

「お待たせいたしました、陛下。誠に申し訳ございませんが、ビアンカは急に旅の疲れが出てしまつたようです……」

「寝込んでしまったのか？」

「ええ。着いて早々にこの有様で、大変申し訳ないのですが……」

「気にする事はない。それよりもすぐに医者を寄越そう」

「あ、いいえっ！ そのようなお手間をかけるには及びません！」

「寝込んでしまったのか？」

「ええ。着いて早々にこの有様で、大変申し訳ないのですが……」

「気にする事はない。それよりもすぐに医者を寄越そう」

「遠慮は無用だ。すでに彼女は私が引き取ったのだから、私が気遣うのは当然だろう」「し、しかし……国から持参した滋養剤を呑ませましたので！ しばらく安静にしていれば、すぐによくなるかと思います」

ヴエルナーの落ち着いた声と、団長の焦りきつた声が交互に聞こえる。時々、金属の擦れるような音が複数するのは、国王が護衛の兵を連れてきているからだろうか。

謁見時の様子から考えれば、団長がいくら言い訳をしても、医者を呼ばれるかもしれない。そう

したら、すぐに毒姫とばれてしまう。

ビアンカの心臓が不安でドクドクと鳴る。

つい、そつと薄く目を開けると、団長の肩越しにヴエルナーと目が合つた。

ギクリと身体が強ばる。

急いで目を瞑ろうとしたが、ヴエルナーからとても優しそうな声をかけられた。

「やあ、起こしてしまったかな」

王に、にこやかに微笑まれ、逆に目を見開いて、彼を凝視してしまった。

「騒がしくしてすまなかつたね。食事は部屋に運ばせるから、何も心配せず、ゆっくりと休むが

良い」

青ざめて硬直している団長の肩の向こうで、若い国王はヒラヒラと手を振る。

そして、医者を呼ぶと言つた先ほどの言葉をあつさりと引つ込め、去つていつた。

「……畜生つ、なんだありや」

扉に耳をつけて足音をうかがっていた団長は、大きなため息とともに悪態をついた。

「こうなりやすぐにでも逃げ出したほうが良いな。お前はまだしばらく、そのまま寝こんだふりをしていろ」

舌打ちをし、自身にあてがわれた続縁部屋に戻っていく。

扉が完全に閉まり、ようやくビアンカも緊張が解けた。ホッと息をつく。

窓から見える初夏の空は、まだまだ明るい。けれど、柔らかい寝具が心地良く、自然と瞼が下りてきた。

ここ数日の旅路と目的に対する緊張で、疲れが溜まっていたようだ。

閉じた瞼の裏に、なぜか先ほど見たヴエルナーの姿が浮かびあがる。

ビアンカが自國ロクサリスの王に会うなど出来るはずもなかつたから、国王という人に会うのは彼が初めてだ。

国の支配者は、『庭園』の管理者である老師たちみたいに、周囲を平伏させる恐ろしい人だと思つていた。

けれど、実際に謁見したヴエルナーは、常に柔和な表情で決して声を荒らげない。使節団長を言いくるめた時さえも、老師たちが肉植物を従わせる態度とは随分違つた。

手を振つて笑いかけてきたヴエルナーの姿をビアンカはさらによく思い出し、瞼の裏に焼きつけようとする。

世話をしていた『庭園』の植物が、とても綺麗に花を咲かせた時みたいに。

肉植物が草花を育てるのは、自分たちが観賞して楽しむためではない。老師たちが薬に使うからだ。それゆえに、見事に育つたものほど、すぐに摘みとられてしまう。

仕方がない事だけれど、せめてその綺麗な花の記憶を、少しでも長く自分の中に留めておきたかった。

ビアンカは、素敵だなと思つたヴエルナーの姿を、思い浮かべつづける。

（だってあの人は、もうすぐ……）

彼の命を枯らすのは、ビアンカだ。

「っ！」

ビアンカの心中でにこやかな笑みを浮かべていたヴエルナーの顔が、たちまち、血を吐き苦しんでいるものに変わつた。

ゾワゾワと恐ろしさが込みあげ、止めようもなく身体が震えてくる。

急いでヴエルナーの姿を消そうとするけれど、どうしてだか、ちつとも消えてくれない。

人間の命の期限を決めるのは、老師たち。

もちろん毒姫の命もそうだ。

ビアンカは、幼い毒姫候補たちを何十人も世話し、老師に与えられる毒草に耐えきれず、血を吐いて死んでいく姿を見てきた。

彼女たちの死を悲しむと、老師たちからいつも、運命を受け入れると一喝される。

だから、ヴエルナーの命がビアンカの毒で枯れるのも、決められた宿運なのだと受け入れるしか

ない……

ビアンカはいつそう強く目を瞑<sup>つむ</sup>った。

——あれほど震えつづけていたのに、いつの間にか眠つてしまつたらしい。廊下と繋がつてゐる扉がノックされる音にビアンカが目を覚ますと、部屋の中はもう真つ暗だつた。

「失礼します。夕食をお持ちしました」

女性の声に、ビアンカは寝起きのかす掠<sup>かす</sup>れた声で返事をする。

すぐに扉が開き、盆を持った侍女が姿を見せた。

彼女が盆を手にしたまま壁際のスイッチを押すと、天井のシャンデリアが輝き、室内が一気に明るくなる。ガラスの球の中で光を放つてゐるのは、ランプのような炎ではなく、魔法の光。

『庭園』では、火事を防ぐためにランプの使用はごく一部に限られ、殆ど<sup>ほとん</sup>の灯りは魔法灯火だ。だから、魔力を持たないビアンカたちが自由に灯りをつける事はできなかつた。

しかし、このシャンデリアは魔力を持たないものでも使えるらしい。

ここフロッケンベルクは、このような『魔道具』を造る技術——鍊金術の国だという。

魔道具も鍊金術も、『庭園』では聞いた事がなかつたから、来る途中の宿で初めてこういつた品を見て、ビアンカはたいそう驚いたものだ。

魔力を持たない者でも使用出来る魔法の道具に改めて感心しつつ、ビアンカは慌てて寝台の上に

身を起こした。

室内が明るくなると、侍女の容姿がよくわかる。

手早くテーブルに皿やカトラリーを並べ、茶を注いでいる彼女は、二十代の半ばといつたところだろうか。リコリスの花のように真つ赤な髪を編んで纏<sup>まよ</sup>め、日焼けした頬<sup>ほお</sup>には、うつすらとソバカラスが残つてゐる。

彼女は素早く食事の支度を終えると、こげ茶色の鋭い瞳でビアンカを一瞬見つめたあと、一札をしてすぐに出ていつた。

去り際の視線が少し気になつたものの、彼女が持つてきてくれた食事を眺め、ビアンカは嬉しくなる。

食事は薄切りのパンに肉や野菜を挟んだものがメインだつた。

美味<sup>おいしい</sup>しそうなシチューやゼリーは浄念ながら諦めなければいけないが、フォークやスプーンに口をつけなくて良いパンなら食べられる。それは、おそらく偶然なのだろうが、ビアンカは幸運に感謝しながら、ハムと新鮮な野菜を挟んだパンを手に取つた。

食べ終えて少しすると、先ほどの侍女が皿を下げに来る。

シチュー<sup>や</sup>ゼリーを食べられなかつた理由は言えなかつたが、せつかく用意してもらつたものを残してしまつた事をビアンカは詫<sup>わ</sup>びた。

赤毛の侍女は、特に不審がりもせずに皿を片づけ、净化魔法を籠<sup>こ</sup>めたという丸薬入りの小瓶を差し出す。

「こちらは陛下よりお預かりしたものです。お加減が悪いのでしたら、湯浴みは避けたほうがよろしいだろうとのお気遣いでした」

この薬は、鍊金術師ギルドが作ったもので、一粒を嚙み碎いて呑むだけで、浄化魔法をかけられたのと同じ効果がある、と彼女は説明してくれた。

つまり、身体と着ている衣服の汚れが瞬時に清められるそうだ。

『庭園』で、老師たちが浄化魔法を使っているのを見た事がある。

老師たちが言う事によると、魔法は選ばれし者だけに与えられる特別な才能だ。

だから、『庭園』の維持のために必要な魔法灯火や結界は別として、肉植物ごとに大切な魔法がかけられる事はない。

そんな魔法の薬を、自分のようなものが貰つて良いのかとしばし迷つたが、結局ビアンカは小声で礼を言つて、薬を受け取つた。

毒姫の汗には強い毒素が含まれているので、『庭園』ではビアンカたちの使つた湯や衣服を洗つた水は、専用の水路へ流している。けれど、『庭園』を出てからは、汚水を流す専用の水路がないので湯浴みも洗濯も出来なかつた。さすがに謁見に汗臭いまま臨む訳にはいかなかつたので、昨日は王宮近くの宿に泊まり、布で身体を拭いたのだ。その布や汚れた衣服は使節団長が全て燃やしてくれた。

今日は緊張しすぎたせいか、汗でドレスがかなり湿つていて、寝間着も含めて、替えの衣類は何枚か持つてきているが、このまま着替えても気持ち悪いだけだろうし、服の始末に困る。

ビアンカは小瓶の蓋を開けて、小指の爪ほどの丸薬を一粒口に入れた。苦味を覚悟しながら軽く嚙むと、意外にも、苺に似た甘酸っぱい味が口に広がる。

ところが美味しい欠片を呑み下した瞬間、オレンジ色の炎が全身を包んだ。

「きやあっ!?

ビアンカは驚愕に悲鳴をあげた。

思い出すと、老師たちが浄化魔法を使う時も、一瞬こんな色の炎に身体を包まれていた。見るのと自分で体験するのとでは、全然違う。

驚いた拍子に、手から小瓶を放り投げてしまい、飛んでいったそれが侍女の額にまとまにぶつかつた。ガツッと固い音が鳴る。

「ごめんなさい！ 痛かったでしよう!?

慌てて駆け寄つたが、侍女は表情を変えなかつた。何事もなかつたように、柔らかな絨毯に落ちた瓶を拾いあげる。

「大丈夫です。軽く当たつただけですので」

平然と答えた侍女は、姿勢を正して、ビアンカへ深々と頭を下げる。

「こちらこそ、説明不足で申し訳ございません。口クサリスからいらつしやつた方なので、浄化魔法には慣れていると思い込んでおりました」

「浄化魔法を見た事はあつたけれど、わたしは魔法を使えないから、驚いてしまつて……」

「そうでしたか」

侍女は頷き、瓶をテーブルの上に置いた。それからチラリとビアンカへ視線を戻し、引き結んでいた唇を解く。

「この薬も浄化魔法と同じように、汚れが落ちた実感はありませんが、埃や汗などは全て落ちています。一日に一錠で十分ですから、それ以上はお呑みになりませんように」

落ち着いた声で説明され、ビアンカは改めて自分の身体を見下ろす。

侍女に小瓶をぶつけてしまつた事ばかりに気を取られていたが、たしかに濡れた布で肌を拭いた時のようなさっぱりとした感じはしない。

それなのに、肌に触れるドレスの布は、もう汗ではりついていなかつた。

「はい！ ありがとうございます」

「それでは失礼いたします」

意外に親切な侍女に、ビアンカは笑顔で頷く。

侍女は淡々と言うと、そのままささと退室していった。

\* \* \*

「——以上の事から、彼女は間違いなく毒姫と思われます」

執務室で、赤毛の侍女アイリーンからの報告を聞き、ヴエルナーは片手で額を押さえた。

山一つを国境として隣接しているロクサリス国とフロッケンベルク国は、祖先は同じと言われ、

言語も同じで文化も似ているが、昔から非常に険悪な間柄だ。

その最たる原因は、魔術師ギルドと鍊金術師ギルドにあるのだろう。

ロクサリスの歴史書には、『魔法使いの矜持きゆうじを軽んじ、魔術師ギルドを追い出された者たちが、山の北側に集落を作つた。それが鍊金術師ギルドであり、フロッケンベルク王国の始まりである』と書かれている。

一方、フロッケンベルクの歴史書には、『柔軟な発想を必要とする魔道具造りについていけなかつた魔法使いが、鍊金術師ギルドから役立たずと解雇され、山の南側で魔法だけを重視するようになつた。それが魔術師ギルドであり、ロクサリス王国の始まりである』と正反対の事が書かれている。

どちらが正しいかは謎だ。

ただ一つ確かなのは、魔法を使うのに必須となる魔力は生まれつきの才能である事。

魔力のある者が、努力でより高度な魔法を使いこなせるようになる事はあっても、魔力がない者が魔法使えるようになる事はない。

世界中を眺めれば、魔力を持たない人間のほうが遥かに多い。

なので、大陸の主な諸国と比べ魔力持ちが生まれやすく、高い魔力を持つ者が支配者層を占めているロクサリス国において、魔力を持つ人間は持たない者より優れていると考えられている。

ところが、二番目に魔力持ちが多いフロッケンベルクでは、やや事情が異なつた。

フロッケンベルクは、作物もろくに育たないほど極寒の地。そのうえ、凶暴な人狼族のなわばり

に近く、彼らの略奪にも苦しめられていた。

そうした中で、魔法はたしかに重宝されたが、数少ない魔法使いに頼つてばかりでは生き残れない。

魔力を持たない人たちは、魔法を学ぶ代わりに身体を鍛えて、きょううじん強靭な肉体と武力を手に入れた。そうした戦士が魔道具で武装をすれば、危険な雪山でも獲物を狩れたり、ほかにも魔道具を活用する事で、なんとか衣食住の確保を出来たのだ。

鍊金術師ギルドの魔道具は、魔法使いの少ないほかの国々でも、便利な品と重宝されるようになつてきている。

現在、フロツケンベルクは鍊金術師ギルドの輸出品と傭兵の派遣による外貨で、成り立っていた。それがロクサリスの魔術師ギルドとしては、非常に面白くない。

選民意識の高い彼らからすれば、誰でも魔法を使えるようにする魔道具は、自分たちの存在を軽くする悪魔の道具だ。

魔法使いの矜持きょうじを安売りする恥知らずがと、鍊金術師ギルドを罵ののしる。対抗して、鍊金術師ギルドも頭の固い高慢ちきめと言い返し、見るに耐えない泥仕合どろじあいを続けている。

歴史を遡れば、これが原因で大小百を超こなべに戦が起こっているのだから笑えない話だ。

ここ数十年は戦が起こっていないが、それはロクサリスがかけてくるちょっかいを、フロツケンベルク王家が受け流しているからにすぎない。

ヴェルナーも先代の王である父も、その前王の祖父も、挑発に乗つて不要な争いをするべきでは

ないと考へだつた。

鍊金術師ギルドとしては面白くないだろうが、この国では王の発言力が強い。それに加え、不要な戦いくさが彼ら鍊金術師ギルドにも不利益を与えるのは明らかなので、怒りを収めてくれている。

そんな状態であつたロクサリスから突然、長年の亀裂を埋めて友好を深めるため、使節団を寄越したいと連絡が来たのだ。ベルク王家が受け流しているからにすぎない。

非常に怪しいと思うのが普通だろう。  
とりあえず角かどが立たないように迎え入れ、油断して尻尾を出したら即座に捕まえようと、入念に準備をしておいた。

城へ来た使節団の中に、どうやら献上される女性がいるらしいと聞き、毒姫ではないかと、えつけん謹見えつけんから用心していたのだ。

(どうして、彼女なんだ……)

ヴエルナーは俯いてアイリーンから表情を隠しつつ、心の中で呻うめく。

謁見えつけんの間で、ヴールを脱いだ彼女を見た時に、あやしく驚きの声をあげそうになつた。

ビアンカは知らないだろうが、ヴエルナーは彼女と会つた事がある。

互いに名前も告げないままだつた彼女を探し出してもう一度会いたいと思うほど惹かれた。一方で、自分の立場を考えれば、もう二度と会わないほうが良いのかもしれない、ずっと悶々とした気持ちを抱えていたのだ。

思つてもみない形で、彼女との再会が果たされた。

毒姫は、この国の鍊金術師ギルドでもよく知られている。

やけに瞳孔が開いて黒目がちに見える瞳、暖かな季節もかかわらず長袖に襟元の詰まつた服、防水加工された薄手袋など、ビアンカからは毒姫の特徴が端々に見えた。おまけに使節団の面々は彼女に決して近づこうとしない。

そこでアイリーンを、ビアンカの部屋の天井裏に忍び込ませたのだ。彼女は、ビアンカと団長とのやりとりや、ビアンカが粉薬を呑む妙な方法など、全て見ていた。

さらに、夕食のメニューでもビアンカを試した。

もしも彼女が毒姫の正体を上手く隠したいのなら、カトラリーを使うものには一切手をつけないはずだと。……そのとおりの結果が、アイリーンの持ち帰った盆に載っている。

このような作業をあっさりこなすアイリーン・バーグレイは、本来、侍女ではない。

彼女はバーグレイ商会という隊商の首領の一人娘。そしてバーグレイ商会は、代々フロッケンベルク王家に仕える密偵機関である。

表向きは、ごく普通に大陸中を行商しているが、裏ではフロッケンベルク国のために各地で情報収集をし、時には極秘裏の王命をこなしてきた。

だから本日も、アイリーンは数人の仲間たちと、使節団を見張るために城内に張り込んでいたのだ。

そのアイリーンに、ビアンカが毒姫ではない証拠をどうにか見つけさせたくて、ヴエルナーは確認を命じた。

しかし、なかば覚悟していた結果に唇を噛む。

「彼女を助けたい。国王としてではなく、私の個人的な我われが侵まだ」

ヴエルナーは顔を上げ、ようやく決断を口にした。

念を入れてアイリーンを天井裏に潜ませたものの、彼とてビアンカと使節団が、黒だと思つたからこそ、兵を率いて彼女の部屋を訪ねたのだ。

仮病を使われるのも予想済みで、それを逆手にとつて医者に見せ確定させようとした。

……しかし、困りきつた顔でこちらを見るビアンカと目が合つた瞬間、心に定めたはずの覚悟が霧散むさんした。

フロッケンベルク国王の立場からは、そうすべきだとわかっていても、彼女を暗殺者の一員だと追い詰める事が出来なくなってしまったのだ。

だつてビアンカはあの時、困っていた見ず知らずの自分を助けてくれたのだから。

ヴエルナーの正体を知らない彼女は、見返りを求めず、彼に手を貸し、名前も告げずにふわりと微笑んで去つていった。

ヴエルナーは苦渋の表情を浮かべる。そんな彼を眺め、アイリーンは頭につけた侍女用のレース飾りを剥ぎとると、困つたように眉をひそめた。

「助けて……あんたを暗殺しにきた子だよ？」

アイリーンはヴエルナーと年の近い幼馴染おさななじみで、昔から、身分の差抜きで親友でもある。

国王ではなく、あくまで個人としてヴエルナーが話しているのに気がついたのだろう、アイリー

ンは幼馴染と話す遠慮のない口調になった。

「わかつている。だが……彼女が自ら望んで暗殺をたくらむ訳がない」

「そりやそうさ。毒姫は、事情なんか何も知られない。使い捨ての毒針なんだから」

アイリーンは素つ氣なく言つたものの、気まずそうに咳ばらいをした。

「まさか口クサリスじや、毒姫なんて、まだ造つていたとはね。あたしだつて、そんな環境に育つた彼女に同情はするし……うん、話した感じじやたしかに、悪い子ではないとも思うよ」

ビアンカが浄化魔法に驚いて瓶を放り投げ、それがアイリーンにぶつかつた時の事を、ヴエルナーに話す。

実は、瓶が倍の速さで飛んできてもアイリーンなら掴み取れたのだが、普通の侍女を演じきたため、あえてそのまま動かなかつたのだ。

「あたしが痛かつただろうって、えらく心配してくれちゃつてさ。優しい子なんだろうね」「やはりそうだろう！」

意気込んで、ヴエルナーはつい机越しに身を乗り出す。アイリーンが胡散臭そうに半眼で彼を見た。

しかし彼女は首を横に振り、それ以上ヴエルナーを深く追及しない事にしてくれたらしい。賢い獵犬を思わせるような鋭い視線で、ヴエルナーをじつと見据える。

「それでもさ、あの子は毒姫だよ。しかももう、それなりの年齢に育つちまつてる」

「ああ」

「あんたの言う『助ける』が、安樂死の薬を呑ませる事じやなく、あたしの考えるのと同じ方法だとしたら、あの子にとつてそれが救いだと断言するのは、ちと傲慢だと思うよ。余計、苦しめるだけに終わるかもしれない」

「君と同じ考え方だと思うよ。これは私の我わが僕ままだとわかつてている。だから、彼女が私の手を取つてくれるよう、最大限の努力をするつもりだ」

ヴエルナーが答えると、アイリーンは軽く肩を竦めて「やつぱりね」と小さく呟いた。そして再び侍女の飾りを頭につけ、改まった口調に戻る。

「それでは、使節団の見張りに戻ります。彼らは城を抜け出す計画を立てておりましたので、明日の早朝にわざと逃がします。城外で捕獲するのが最適かと」

「ああ、頼む」

ヴエルナーは頷いた。

彼らをこのまま城内で捕獲し、ビアンカへ呑ませていた毒薬を証拠に暗殺者と認定するのは容易い。

当初はその予定だつた。

だが、ビアンカが仲間だと糾弾されないためには、視察団を密かに捕らえなくてはならない。

ヴエルナーは右手の指にはめた、青い石の指輪を弄つた。指輪の右の部分が蓋になつており、開くと中には銀色の粉薬が入つていて、水差しからコップに水を注ぎ、ヴエルナーはその薬を一息に呑み干した。

翌朝。

ビアンカはかなり早い時間に目を覚ました。

昨日は夕方から眠つてしまつたせいかもしれない。

カーテンの隙間から、少し青白い陽光が差し込んでいた。三階にあるこの部屋の厚いカーテンをそつと開くと、朝もやが薄くかかる外の景色が見えた。

手入れされた庭を高い石垣が囲み、その向こうに王都の町並みが広がつていて。大きな両開きの窓ガラスは二重になつていたが、掛け金を外せば簡単に開いた。部屋は三階にあるといえ、下にちょうど良さそうな植え込みがある。

ここから飛び降りても、怪我するだけで済むかもしれない。

ビアンカは窓を閉めた。

荷物を開けて着替え、いつも『庭園』でやつていたように髪を簡単に結い、髪飾りをつける。

隣の部屋はやけに静かだ。団長たちは昨夜遅くまで何か話していたようだつたから、まだ眠つているのだろう。

ほどなく昨日とは別の侍女が朝食を運んできた。盆に載せられているのは一口大の小さなタルトにチーズ、大粒のブルーベリーなど、そのまま摘んで食べられるものばかりだ。

朝食を終えてから、しばらく部屋で大人しくしていった。けれど、続き部屋のほうは相変わらず静かで、使節団長が指示をしに来ない。

『庭園』にいる時は、いつも何をすればいいのか老師から指示があった。この道中では、使節団長に従うよう命じられていたから、彼が来ないとどうしたら良いのかわからない。

迷つたものの、思いきつてビアンカは続き部屋の扉をノックした。

しかし、返事がない。

何度もノックしても同じで、しまいにそつと扉を開けてみると……誰もいなかつた。  
(え……?)

寝台は寝乱れたままで、荷物は一つも残つてない。さらに向こうの部屋に繋がる扉も開け放しになつていて、無人の室内が見える。

すぐに逃げ出すつもりだと団長は言つていた。もうすでに旅立つたのだろうか?

廊下のほうの扉を恐る恐る開けると、たちまち金属音とともにビアンカの前に大きな影が立ち塞がつた。

扉の脇に立つていた大柄な兵士が、生真面目そうな顔でビアンカを見下ろす。

「観察団の方々は早朝に発たれました。後ほど陛下がお見えになりますので、申し訳ございませんが、外出は控えていただきたく存じます」

「はい……」

ビアンカは大柄な兵士の圧迫感に、小さく震えながら頷いた。いつからここに見張りが立つてい

たのか、気がつかなかつた。

「必要なものがあればご用意しますので、お申しつけください」

そう言つて兵士は扉を閉めてしまつた。ビアンカは朝日の差し込む部屋の中で立ち尽くす。

観察団が去つたなら、ビアンカはすぐに役目を果たさなければならない。すなわちヴエルナーの

暗殺だ。

(あ……っ!)

不意に重大な事に気づき、ビアンカは続き部屋へ駆け込む。

棚や引き出しを探してみたが、あの薬は見つからない。やはり団長は残りの薬を持ったまま逃げてしまつたようだ。

毒薬を呑まなければ、三日ともたずに毒姫は死んでしまう。

薬が切れて死ぬ時は、凄まじい苦痛（すさまじい苦痛が伴うと）が伴うと、老師から聞かされている。

だから、敵を殺して、使命を果たし自らの手で死を迎えるのが、唯一、苦しまない方法だと  
も……

(薬は残つていないうがいいのよ。もし見つけられたら毒姫だとバレてしまうもの。ヴエルナ  
ー様とは、すぐにお会い出来るようだし、そうすれば……)

ドクドクと激しく暴れる心臓を押さえ、必死に自分へ言い聞かせる。

本来ならば昨夜には全て終わつていたはずなのに、予想外の出来事が続いたせいか、不安でたま  
らない。

そのうち、続き部屋に侍女が掃除をしに来て締め出されてしまい、ビアンカはひたすら落ち着か  
ない気分のまま自室で過ごした。

部屋の安楽椅子は座り心地が良いし、退屈しないようにと、ヴエルナーが数冊の本まで届けてく  
れた。

どれも面白そうなタイトルで、綺麗な挿絵がついていたが、不安が大きすぎてまつたく頭に入つ  
てこない。

昼食は、カトラリーを使わずに済む魚と野菜を挟んだパンで、なんの心配もなく食べられるはず  
だつたが、一切れを呑み込むのが精一杯だった。

椅子や寝台に、座つたり立つたりし、部屋をうろうろと歩き回る。

部屋の置時計が午後の三時をさす頃、不意に扉が叩かれた。

「陛下がお見えになりました」

扉の外から聞こえた兵士の声に、ビアンカは椅子から飛びあがり、直立不動になる。

「はい！」

上擦つた声をあげると同時に、扉が開きヴエルナーが姿を現した。彼の横には、扉を見張つてい  
た兵士がいるものの、ほかに護衛などは連れていないようだ。

「なるべく早く来たかったんだが、こんな時間になつてしまつた」

ヴエルナーはそう言いながら部屋に入ると、正面に立つてニコリと微笑む。

「政務の休憩時間が取れたから、少し城内を散歩でもしないか？」

意外な言葉に、ビアンカは思わず目を見開く。けれど、服従しか教えられてこなかつた口が、返答に詰まる事はなかつた。

「はい」

すぐにそう答え、ヴエルナーのあとに続いて部屋を出る。

「夏は特に忙しくてね。聞いているかもしれないが、ここは雪が深いので、夏しか外との通行が出来ないのでよ」

ヴエルナーの後ろにつき従うべきかと思い、一步下がろうとしたのだが、彼はビアンカと並んで歩きながら、きさくに話しかけてくる。

そんな国王に、どう対応していいものか戸惑うものの、次第に彼の話に引き込まれ、気がつけば楽しく聞き入っていた。

それに、ヴエルナーが案内してくれる城の内部は素晴らしい。

手入れされた温室に、途方もない量の本を納めた図書室、見事な天井画の描かれた廊下など。これでも城のほんの一角だというから、迷子になりそうな広さだ。

使節団の人たちは、ヴエルナーやフロッケンベルクの国情にも詳しいようだったが、ビアンカには殆ど何も知らされていない。

道中で聞きかじったのは、ヴエルナーが早くに両親を亡くし、十四歳という若さで即位した事と、国民からとても人気があるらしいという事くらいだ。

だから、国内の景色を描いた絵画の並ぶ廊下を案内されながら、ヴエルナーから聞く話はどれも

興味深いものばかりだつた。

大陸の最北に位置するフロッケンベルクは、一年の内に七ヶ月間が冬という極寒の地で、記録では最長で九ヶ月間も雪が降り続いた事があるそうだ。

深い森林に囲まれた王都は、夏の一時期しか外界に開かれないという。

冬の森には、大人の背丈よりも高く雪が積もるし、突発的な吹雪が多いため道に迷いややすい。さらに、飢えた狼がうろつくうえに、恐ろしく凶暴な人狼族が、獲物を求めて高山地帯からよく下りてくるそうだ。

雪解けの春も油断は出来ない。溶け始めた氷雪が雪崩なだれを起こす危険性が高くなるからだ。

だから、長い雪による閉鎖期間を耐え抜いた民にとつて、夏は待ち焦がれていた開放の季節。

安全になつた森林の街道を通つて、物資を大量に積んだ隊商が続々とやつてくるし、傭兵や鍊金術師として他国へ出稼ぎに出ていた者も帰つてくる……

ヴエルナーからそんな話を聞きながら、ビアンカは美しい絵画の数々を眺めていく。

各々の季節を描いた絵が、数枚ずつあつた。

真冬の雪景色の中、満月に吼ほえる狼たちの絵。短い秋に色づく木々と、獲物を狩る猟師の絵。残雪の合間に小さな緑の芽が息吹く春の絵。

そして、夏の王都を描いた絵には、ひしめく幌馬車ほうばしゃの列や、出稼ぎから帰つた人々と待つていた家族が喜び抱き合う姿が明るい色彩で描かれている。ビアンカは特に、家族の絵が気に入つた。

家族がどんなものか知らないけれど、描かれている人々はとても嬉しそうな顔をしていたから。肉植物にだつて親兄弟という存在はいるとは思うのだが、『庭園』ではどの肉植物も、まつたくそういった関係になかった。

夜伽をするために育てられ、外へ送り出される肉植物もいるが、彼らは不要に子を孕まないよう身体を作り変えられている。それに、肉植物同士が親しくする事や、勝手な交配は固く禁じられていました。

そのような真似をすれば厳罰として、即座に『庭園』の最下層にある地獄へ落とされる。だから、誰もそんな関係を持つとしなかつたし、新しい肉植物が生まれる瞬間を見た事はない。きっと、老師たちに交配を許された者たちが、あの広い『庭園』のどこかで、新たな実を孕んでいたのだろう。新しい肉植物の赤子はいつも、老師たちがどこからか必要な数を連れてきた。彼らがどこから来たのか尋ねたり、自分の家族について考えたりする事は、許されなかつた。

肉植物は肉植物であり、家族という存在が必要ないと老師が判断したなら必要ないのだ。

そんな事を思い出しているうちに、風景画の列は終わつた。

「——と、まあフロッケンベルク王都の一年はこのようなものだ。王都は長く雪に閉ざされるから、ここに住むと非常に大変で不便な生活を強いられる、他所の人間には思われがちだがね」

おどけるように軽く肩を竦めたあと、ヴエルナーはすぐ快活に笑つた。

「たしかに大変な部分も多いのだが、厚く氷が張るからこそ、夏も十分な氷が確保出来るし、この城は雪に囲まれた姿が一番美しいと私は思う。冬に王都へ住む者だけが見られる姿だ」

楽しそうに言う彼につられてビアンカも微笑んでしまつた。

「そろそろ部屋に戻ろうか」

ヴエルナーが踵を返し、ビアンカもそれに従う。

部屋に戻ると、兵士が敬礼をして扉を開け、ヴエルナーは先立つて部屋に入る。二人の背後で、扉が静かに閉められた。

ヴエルナーは立つたまま、しばらく窓の外の傾きかけた夏の陽を眺めていたが、ゆっくりと振り向く。

「君が、冬の王都やこの城を気に入ってくれれば嬉しい」  
ひときわ穏やかな聲音とともに微笑まれ……その瞬間、冷水を浴びせかけられたように、ビアンカは我に返つた。

クリーム色の壁と青銀の屋根をしたフロッケンベルクの王城を、ここに来る時にとっても綺麗だと思つていた。それが、冬にはもつと綺麗になるらしい。

ヴエルナーがあんまり楽しそうに話すから、ビアンカもつい聞き入り、その素敵な景色がいずれ、自分の前にも訪れるような気になつていた。

——どんなに素敵でも、それを見る事など出来る訳がない。だつて、もうすぐに……

「……はい」

声は、消えそうなほど小さく震えてしまつた。

部屋に一人でいる今が、絶好の機会だ。しかもヴエルナーは、ビアンカと身体が触れ合いそうな

ほど近くにいる。

教えられたように、このまま手を伸ばして首筋に抱きつき、死の口づけをすれば良い。  
やらなければと思うのに、足がどうしようもなく戦慄く。

昨日、瞼の裏に浮かんだビアンカの苦しむ顔が、チラチラと見えていたが、ふとその表情が真剣なものになる。

「君は、毒姫だな？」

「——っ!!」

ビアンカは総毛立ち、ハクハクと唇を震わせた。

（どうして!?　なぜ見破られたの!?)

頭の中が恐怖でいっぱいになつて息が出来ず、喉<sup>のど</sup>がヒツ、ヒツと変に鳴る。  
(もうだめ！　見破られたら、捕まつて、死んだほうがましなほど、痛くて苦しい目にあわされる!!)

「ビアンカ、落ち着いてくれ。私は君を……」

ヴエルナーが何を言つているのかよく聞きとれない。

ただ、老師たちに繰り返し教えこまれた声が、頭に鳴り響いた。

『万が一暗殺に失敗しても、絶対に捕まるな。その前に死ね！　自分で死ね！　死ね!!　死ね!!!』  
無意識に、ビアンカは自分の髪飾りを引き抜く。

その拍子に足がもつれて、無様に綻<sup>じゅうたん</sup>毯<sup>じりもん</sup>へ尻餅<sup>しりもち</sup>をついてしまつたが、花を象<sup>かた</sup>つた飾りを握り締めたまま離さずに済んだ。するどく尖らせた飾りの先端で自らの喉<sup>のど</sup>を突こうと振りあげる。

「待て！」

ヴエルナーが叫び、ビアンカに飛びかかった。髪飾りを握った手首を掴む。

振りほどこうとビアンカは暴れたが、もう片方の手首も押さえられた。

恐怖に声も出ないまま、もがきつづけたが、床<sup>あおむ</sup>へ仰向けに倒れた身体にのしかかられて、完全に動きを封じられてしまう。

「陛下！　いかがなさいましたか！」

激しい音が、外にまで聞こえたのだろうか。兵の焦り声とともに、扉が開く音がした。

その瞬間。ヴエルナーはビアンカの両手首を片手で纏めあげると、もう片方の手で彼女の頸<sup>あご</sup>を掴む

んで自分のほうに向けさせる。

そして、ビアンカの唇を自分の唇で塞<sup>ふさ</sup>いだ。

「んんっ!?」

（この人、何を、しているの？）

頭の中が、驚愕<sup>きよがく</sup>で真っ白になった。

「しつ、失礼いたしましたつ!!」

兵が慌てて扉を閉めると、ようやくヴエルナーが口を離した。

「すまない。そこまで追い詰めてしまつていたとは……」



驚いて動きを止めたビアンカを組み敷いたまま、彼は深いため息をつく。

「約束する。君を暗殺者として捕らえはしない。どうか落ち着いて、話を聞いてほしい」「ど、うして……どう……して……」

混乱しきつたまま、震える小さな声でビアンカは繰り返した。

「君を捕らえない事が不思議か？ それとも、私が君に口づけても生きている事か？」  
穏やかに問いかえされても、ビアンカは「どうして」と繰り返すしか出来なかつた。

半開きになつていた口を、ピタリと隙間なく合わせられたのだ。猛毒の唾液だえきが彼の唇にも触れたはず。

毒姫は年齢が高くなるほど、強力な毒を帯びる。

ビアンカの体内に蓄積された十八年分の猛毒は、唇など皮膚の薄い部分に触れれば、そこから吸収され、数十秒で死に至る。

「捕らえないのは、君自身に罪がない事を知つてゐるからだ。暗殺の理由もその首謀者も聞かされず、私をただ殺せと送り込まれただけだろう……嘆かわしい事に、我が国でもかつては毒姫を造つていた。すでに禁じてはいるが、鍊金術師ギルドにはその罪の記録が残されている」

苦々しげな声で言うと、ヴエルナーは空いている片手で口元を押さえ、少し咳き込んだ。

「つ……しかし、おかげでこうして解毒剤を呑んでおく事が出来た」

「……けどくさい？」

なのにまつたく現実感がなくて、初めて聞いた言葉のように、鶯鶯返しにしてしまった。

「ああ。半日以上前に呑んでおけば、何種類かの強力な毒に対抗出来……ツ！」

ヴエルナーがまた咳き込んだ。その頬は赤く火照りはじめ、額に大粒の汗が滲んでいる。

「ハ、ア……毒を分解するために一晩ほど高熱が出るが効果は確かだよ。大昔に、私の最も信頼する人が作つた薬だ」

苦しげに顔をしかめつつ、ヴエルナーはビアンカに真摯な視線を向ける。

「その人は、毒姫の身体を無毒に戻す方法も考え出した。ただ、毒が抜けるまで何日も、高熱と全身の痛みに苦しまなければならず……耐えられなかつた毒姫のほうが、多かつたそつだが……」

「ひつ」

恐ろしい言葉に、ビアンカの喉からまた引き攣つた声が漏れた。

「怖がらせてすまないが、最初に全ての事実を話しておくべきだと思う。君が解毒治療に耐えられるか、正直に言えばわからない。この場で自害したほうが楽だつたと、恨まれるかもしれないとも思う。それでも……私は君に、解毒治療を受けてほしい。君を本来の身体に戻したい」

荒い呼吸とともに吐き出された言葉に、ビアンカは耳を疑つた。

（わたしに、解毒を……？ 毒を持たない……本来の身体……？）

頭がグチャグチャに混乱して、身震いが止まらない。目の端が熱くなつて視界が滲みはじめるが、瞬きを必死に繰り返して、猛毒の涙が零れるのを堪えた。

ビアンカは毒姫。老師がそう定めたのだから、ほかの存在になどなれるはずがない。

「ひなぎく  
雛菊がどんなに頑張ろうと、薔薇の花を咲かせられないように、運命や身分は、最初から決められている。」

「ずつと、そう教え込まれて生きてきたし、疑いもしなかつた。」

（でも……でも……もし、ほかのものになれたとしたら……？）

「老師に背く考えは、思い描くだけでも重罪だ。こんな思いが頭の中にチラつくなど……」

（わ、わたし、なんて恐ろしい……だめ、だめよ！ こんな事、考えては……）

恐怖で歯がガチガチ鳴つた。

それが死であろうとも、優れた存在である老師がそう命じるならば、最良の道。

老師たちは恐ろしいけれど寛大で、下等な肉植物たちでは手に負えぬ命運を把握し、いつも最良の場所に導くのだから。それに背けば、酷い結果になるだけ。

「毒姫でいるのが、わたしのため……老師様たちが、そうおっしゃるのだから……」

ようやく声を絞り出した。顔は背けたまま視線だけ動かし、恐る恐るヴエルナーの表情をうかがう。

毒の分解に伴う苦しみなのか、彼は苦悶に耐えるよう眉根をきつく寄せ、ビアンカを眺めていた。

「君が毒姫のままでいたいと望むなら、解毒治療を施さず、適量のアコニトを与えづけて密かに匿う事も出来る」

「え……？」

「しかし、このまま毒姫でありつづけたら、君の身体はもう長く持たない。抗体を持っていても、

毎日呑み続ける毒で内臓に負荷がかかりすぎている。二十歳まで生き延びた毒姫を、君は見た事があるか？」

その問いかけに、ビアンカは震えながら黙つて首を振った。

彼女は今の毒姫で最年長だ。

幼い頃には自分より年上の毒姫が数人いたが、彼女たちはいずれも、今のビアンカくらいの年までにはどこかへ連れ出されてしまうか、内臓が耐えきれなくなつたかのように、突然血を吐き死んでしまつた。

「ビアンカ」

黙りこくつているビアンカに、ヴエルナーがニコリと笑いかけた。

「私は君に、この王都の冬を見せたい。ああ、でもその前には秋があるし、その景色だつて良いものだ。冬の次には春もある。全部、見せたい。それを見る君を、私は見たい」とても苦しそうに汗を滲ませているのに、ヴエルナーの笑みは思わず見惚れてしまうよう、柔らかなものだつた。

「だから、君に命じはしないし、君のためなどとは言わない。私のために、解毒治療に耐えてくれないだろうか？」

「…………」

ヴエルナーの言葉がビアンカの心に絡みつき、誘惑する。

許されない道を歩いてごらんよ。苦しくて痛い道かもしれないけれど、その先に素敵なものがあ

るよと、囁く。

強ぱりきつて動かせなくなつていた手から、自然と力が抜けた。

髪飾りがボトリと緘痰に落ちる。

赤く塗られた木製の花部分は、強く握りすぎたせいで砕けていた。震えの止まらない手の中で、細かな破片が一緒に揺れる。

「…………はい」

何度も唾を呑んだ末、ようやく掠れた声でビアンカは答えた。

『庭園』で、毎日毎日何も悩む事なくしていた返答と、同じ言葉のはず。けれどそれは、初めて勇気を奮い起こして口にした『はい』だつた。

二日後。

万年雪を載せた山麓さんろくの合間にから、太陽が眩まぶしい光を投げかけ、フロッケンベルクの王都に素晴らしい夏の朝を告げる。

王宮に程近い老舗商店街は、早朝から朝市の準備や店の掃除に忙しく、誰もが楽しそうに働いていた。

この通りを王宮とは逆方に抜けると、鍊金術師ギルドや王立図書館があり、王都で最も賑にぎわう中心街になる。

『フロッケンベルク王都の夏は、昼間に働き夜は遊ぶ。眠るのは冬になつてから』と大陸諸国では揶揄やゆされるが、あながち間違いでもない。

商店は外国からの客を相手に商売へ勤しみ、炭鉱では猛烈な勢いで採掘を行う。農夫は短い夏に出来るだけ作物を育て、獵師は森に獲物を求める。

そして夜は、久しぶりに帰還した旧友と大いに酒を酌くみ交わしたり、家族だんづか團だん欒らんのささやかな宴を楽しんだりするのだ。

学校も二ヶ月間の夏季休みに入る。子どもたちは熱心に家の手伝いをするが、その合間に山菜や

きのこを採りに野山を回つたり、川で魚を漁あさりながら水遊びをしたりと、夏を存分に楽しむ。

活氣溢あふれるそんな早朝の商店街を、一人の紳士が歩いていた。

細身ですらりとした体格に、赤毛ともつさりしたヒゲが特徴的だが、そのヒゲが顔の下半分を覆おおつてるので、にわかには年齢がわからない。

そそこそこ品のいい身なりをしているが、供の一人もつけておらず、ステッキでコツコツと石畳を鳴らしながら歩いていく。

はりきつて店先を掃いているおかみさんや、釣竿とバケツを持つてかけていく子どもたちを楽しそうに眺めながら、その紳士は商店街近くの細い小路こみちへ向かった。

小路の両脇には、古い小さな家がひしめき、商店街とは打つて変わつて静かだ。いくつかの煙突から煙が出ているが、こちらの住民はまだ殆ど寝つているらしい。

肩を寄せ合うように並ぶ家々は、どれも似通つていた。北風に耐える頑強な赤いレンガ作りで、屋根は積雪を防ぐために切妻きりづまとなつてている。

紳士が目当ての家の呼び鈴を鳴らすと、ほどなく扉が開き、背の高い少年が顔を突き出した。

年頃は十七、八といったところだろうか。暗灰色の髪はツンツン硬ほりそうで、明るい琥珀色こはくいろの瞳をしている。

整つた顔立ちだが、線が細いヴエルナーとはまるでタイプが違い、野性味と知性がほどよく同居していた。

必要なだけの筋肉が綺麗についた無駄のない体格で、着崩したシャツの襟に、見習い鍊金術師の

身分を示す青いブローチがなかつたら、土官候補生だと思われるかもしれない。

少年は、紳士を見ると、怪訝な顔をした。

「おはよう、ルーディ。私だよ」

赤毛の紳士に扮していたヴエルナーが、片手を挙げて挨拶すると、目を丸くしていたルーディはブハッと盛大に噴き出した。

「いくら変装しても、俺の鼻は誤魔化せないさ！ その変なヒゲに、ビックリしただけだつての！」

「似合わないか？ なかなか良いと思うんだが」

ヴエルナーは窓に映つた自分を眺めて、つけヒゲを弄る。ルーディはもう一度、噴き出した。

「元の顔が一番だよ。ほら、さつさと入れつてば」

背中を押して中に促され、ヴエルナーはつけヒゲと赤いカツラを取りながら笑う。

ヴエルナーの幼い頃からの趣味はチエスだが、十四歳の時に父が逝去して王位を継いでから、もう一つ増えた。

執務の合間に、変装して城を抜け出しても、束の間のお忍びを楽しんでいるのだ。

物売り、松葉杖をついた老人、傭兵、貴族、旅の吟遊詩人……変装のレパートリーは実に幅広く、

今のところ殆どバレた事はない。

「しつかし、もう趣味つてより生き甲斐なんじやないか？ その妙な変装」

ルーディが軽口を叩く。

十歳も年長の、しかも国王相手に大層不敬な言葉遣いだが、ここにいる時のヴエルナーは、フ

ロッケンベルク国王ではなく彼の親友なのだ。

飾らない空気が心地良く、ヴエルナーも存分に碎けた口調になる。

「いやいや、これも国王の義務だよ。何しろお忍びで出歩く王がこの世にいなくなつたら、誰がお伽話を面白くする？」

「お伽話の主役なら、いつでも狼が変わつてやるさ。可愛い女の子だつて、たまには王子様だけじゃなく……あー、ところで何か食う？」

「実は徹夜あけでな。薬草茶を一杯貰えるとありがたい」

お忍び中の国王は勝手知つたる居間で、お気に入りの椅子に座り、窓。

ビアンカの毒を解毒するための高熱で一晩寝込んだのは、一昨日のことだ。そのあと、ただでさえ忙しい夏の政務が溜まつてしまつたのを徹夜で片づけ、ようやく友人に会いに来た。

この家は小さく古い建物とはいえ、家具はどうも品の良い上質なもので、カーテンと絨毯の色が、白壁とダークブラウンの柱によく調和している。

ただ、読みかけの本や脱いだ上着、薬草の瓶などがあちこちに置きっぱなしで、散らかり放題。せつからく上品な室内的な内装を台無しにしていた。

「寝込んだって聞いたけど、元気そうじやん」

ルーディがキッチンから湯気の立つマグを二つ持ってきて、片方をヴエルナーに押しやる。

「国王がいつまでも寝込んでいる訳にはいかないさ。それにしても情報が早いな」

疲れた身体に染み渡る薬草茶を啜りながら、ヴエルナーは頷く。

高熱で寝込んだ事は、あまり公にしないように言つてあるが、人の口に戸は立てられない。

ヴエルナーは、ふうつとため息をついた。行儀悪くテーブルの端に腰かけたルーディがそれを眺めて、ニヤリと口の端を上げる。

「鍊金術師ギルドはその話でもちきりだよ。ヴエルナー陛下が、憎らしいロクサリスから献上された女に夢中だつて、お偉いさんたちはカンカンさ。陛下と会う時以外は部屋からも出さないほどの執着ぶりで、忙しくて疲れてるのに、やりすぎてぶつ倒れたつて？」

「ゴフツッ!?」

あんまりな表現に、ヴエルナーは盛大にむせ返つてしまつた。

「おいおい、落ち着けって！」

ルーディに背をさすられてなんとか息を整え、零した茶を拭くと、ぐつたりとテーブルに突つ伏した。

随分と無節操な男のような言われ方だ。けれど、何かほかの理由が……など、変に勘ぐられるよりもシカと、もう一度ため息をつく。

ヴエルナーの熱の原因がビアンカの毒と知られないため、アイリーンに協力してもらつて色々と小細工をした。

その結果、ヴエルナーは献上されたビアンカを大層気に入り、彼女と休憩時間を過ごしつづけたところ、忙しさからの過労で倒れた事になつてゐる。

だからまあ、多少は大袈裟に嚙みが膿らんでいても仕方あるまい。

「……でも、俺はこの話を、ちょっと信じられないね」

淹れなおした茶を寄越しつつ、ルーディが鼻に少し皺を寄せた。

「いくら気に入ったからつて、何も悪い事してない女を、玩具みたいに部屋へ閉じ込めるなんてさ。献上品の女はそう扱われるのが普通だつて聞くけど、ヴエルナーは絶対やらないだろ」

きつぱりと断言する彼に、ヴエルナーは自然と口元をほころばせる。

「実はな……」

自分を理解し信じてくれる親友へ、ビアンカが毒姫である事も含めて全てを話した。

「まさか、俺に会いに来たのは……」

聞き終わると、察しの良い少年はとても嫌そうな顔になり、身構える。

「ああ。ビアンカへ解毒治療を施してほしい」

ヴエルナーが知りうる限り、彼が一番の適任者だつた。

ルーディは鍊金術を習い始めてからまだ数年で、持つ魔力も低いために、魔道具は殆ど作れない。

だが、薬草学には一人前以上に精通しており、薬草の調合だけで魔法を必要としない薬ならば、相當に難しいものでも作れた。

もはや毒姫はフロッケンベルク国内にいないので、その解毒治療は古い記録が残るのみだ。幸い、調合が非常に難しいとはいえる必要とする薬に魔法は特に必要ない。

ルーディは、そういうた類の薬は全て試作済みだ。毒姫の身体を元に戻す薬の調合も鍊金術師ギルドに残されていた毒姫の髪を使った解毒試験では成功している。